

1 検定試験の質の向上等に関するこれまでの審議のまとめ

2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14

4. 検定試験の質の向上等

(1) 検定試験の意義について

(2) 検定試験の評価について

- 1 評価の活用による検定試験の信頼性向上の意義について
- 2 検定試験の自己評価
- 3 検定試験の外部評価

(3) 検定試験の活用について

- 1 検定試験の活用の意義について
- 2 検定試験の活用の促進について

4. 検定試験の質の向上等

(1) 検定試験の意義について

- 「一億総活躍社会」を形成するためには、社会人の学び直しは不可欠。その中で、検定試験は、学び直しの成果の確認を可能にするものであり、重要な意味を有するのではないか。
- 検定試験という語は社会一般では多義的に用いられているが、平成22年6月の「『検定試験の評価ガイドライン（試案）』について（検討のまとめ）」（以下、「検討のまとめ」という。）と同様に、「社会一般で通称的に使用されている「検定」や「資格」、「認定試験」などの用語を含め、広く学習成果を測定する、いわば物差しとしての役割を果たしているもの」を包括的に「検定試験」という用語で整理してはどうか。
- 社会人以外についても、学習者にとって、検定試験は、いつでも、どこでも、誰でも受験することができるものであり、チャレンジ精神の涵養、自己の学習の到達目標・到達度の確認、継続的な学習意欲の喚起、教養の涵養など様々な意義があるのではないか。
- 人材を活用したい側にとっても、検定試験は、課題の解決のために必要な知識・技能を持っている人材を明らかにすることができるものであり、人材のマッチングに資するところが大きいのではないか。
- さらに、高大接続システム改革会議中間まとめにおいては、高校生の多様な学習成果を測定するツールを充実する観点から、高等学校基礎学力テスト（仮称）の導入に加えて、校長会等が実施する検定試験の活用促進や各種民間検定の質的向上・普及促進が提言されている。

(2) 検定試験の評価について

1 評価の活用による検定試験の信頼性向上の意義について

- 平成22年の検討のまとめにおいては、評価を、その主体に着目して、大きく自己評価と外部評価に分類し、さらに、外部評価は、関係者評価（様々な検定事業者間で評価を行う取組）と第三者評価（希望する検定事業者に対して専門家等が行う評価）に分類した。
- 成熟化した社会においては、個人の学習成果も根拠に基づいて説明することが重要であるのではないか。そして、検定試験が、個人の学習成果を証明し、活用するものであるためには、受検者や利用者からの信頼性が確保されること、さらに、このためには、信頼性が確保された仕組みであるためにはプロセスの管理が重要であり、各検定事業者は、自己評価・外部評価を実施し、公開することにより、実施する検定試験

1 の質や信頼性を表明することが望まれるのではないか。

2

3 2 検定試験の自己評価

4 ○ 平成23年に「検定試験の自己評価に関する研究会」が取りまとめた「検定試験の
5 自己評価シート」は、検定試験の評価を行う際の視点やその内容として考えられるも
6 のについて、「実施主体」、「実施内容」、「実施手続」、「検定結果の活用促進」、
7 「継続的な学習支援」の5分野に分けて評価項目を設定したものである。

8

9 ○ 平成26年度に受検者数5,000人以上の検定試験を実施する団体等90団体に対して
10 実施したアンケートによると、約7割の団体が、「検定試験の自己評価シート」を活
11 用した自己評価を実施している。

12

13 ○ この「検定試験の自己評価シート」は、各検定事業者にとって、自らによる組織的
14 ・継続的な事業改善のための指針となるものであり、検定試験の質の向上のために、
15 各検定事業者が全ての検定試験について「検定試験の自己評価シート」を参考にして、
16 自己評価を実施し、利用者や受検者にも分かる形でその結果を公表することが望まれ
17 るといえるのではないか。

18

19 3 検定試験の外部評価

20 ○ 検定事業者による自己評価のみでは、評価基準に差異が生じる。評価の客観性を高
21 めるためには、第三者評価が重要ではないか。専門家等から成る民間団体による第三
22 者評価を行うことにより、評価の客観性、専門性、透明性が確保され、各検定事業者
23 の自律的な質の向上や改善がさらに促され、検定事業全体の質向上や信頼性の確保に
24 資するのではないか。

25

26 ○ ただし、評価に当たっては、検定試験の多様性を阻害しないよう、各検定試験の規
27 模、目的、測ろうとする知識や技能、受検者等を踏まえた評価の視点を工夫する必要
28 があるのではないか。

29

30 ○ 第三者評価を実施すべき検定試験及び評価項目について、どのように考えるか。

【これまでの御意見】

《評価項目についての意見》

- ・ 検定の内容についての評価ができるとよいが、例えば、テスト学会などで議論されている基準を整理して、日本に沿うような仕組みが考えられる。
- ・ 評価の公開についても、見える形で行うべき。検定の普及という観点からは、わかりやすく見えやすくあるべきであり、公開の仕方についても評価項目に含めるべき。

《検定を分類して評価を行うべきとする意見》

- ・ 検定は、規模・目的によって様々。また、「検定の運営・検定事業者の組織

に関することの評価」と「検定の中身の質保証に関することの評価」は、切り分けて考えるべき。「運営・組織に関すること」は、単一の評価軸で論じることができるだろうが、「検定の中身の質保証に関することの評価」は、検定によって様々であり、何らかの形で検定をグループ化して行うことができるのではないか。

- ・ 検定の評価は、当該検定の活用の態様によって分類して考えるべき。大学入試等も含めて広く活用される検定については比較的厳格な形での評価を、自己実現のための検定については緩やかな形での評価をすると良いのではないか。
- ・ 大規模な検定は第三者評価まで行うことが必要であろうが、始めたばかりの小さな検定は、自己評価など実施しやすい態様で評価を行えばよいのではないか。

《その他》

- ・ 「検討のまとめ」において、検討試験は多様であるから事業者の負担とならないように、といったことが書かれてあるが、評価は積極的に行うべきであり、評価を「負担」と考えずに、評価が質の向上にとって不可欠であるという方向で検討すべき。

1

- 2 ○ 第三者評価の実施機関について、どのように考えるか。

【これまでの御意見】

- ・ 第三者評価はどのような方に行ってもらうのが難しい。例えば、難易度が同じ程度の検定試験のグループ同士で、どのように関係者評価・第三者評価を行うのかを考えていくことは考えられないか。
- ・ 第三者評価を誰が行うことができるかということを見ると、第三者評価というのは大変難しいことなのではないか。
- ・ 第三者評価を誰に行ってもらうのかは難しい。

3

- 4 ○ 第三者評価機関の質保証の在り方について、どのように考えるか。

【これまでの御意見】

- ・ 第三者評価についても、自己評価シートのような評価の基準になるものを作成して、第三者評価を行い、評価結果を公開してはどうか。

5

- 6 ○ 関係者評価について、どのように考えるか。また、自己評価と関係者評価、第三者
7 評価の関連について、どのように考えるか。

【これまでの御意見】

- ・ 様々な検定事業者間で行う関係者評価はなかなか難しく、行っていない。ただ、他の検定事業者が公開している自己評価シートから、その検定事業者がどのようなことに留意しているのかがわかる。また、個別に検定事業者と

情報交換をすることはある。

- 例えば、難易度が同じ程度の検定試験のグループ同士で、どのように関係者評価・第三者評価を行うのかを考えていくことは考えられないか。【再掲】

1

- 2 ○ これらの取組を通じて、検定試験の質の向上や信頼性の確保が進むことにより、さ
3 らに検定試験の活用の幅が広がり、これが更なる信頼性の向上を呼び起こすという好
4 循環を呼び起こすといえるのではないか。

5

6

7 (3) 検定試験の活用について

8 1 検定試験の活用の意義について

- 9 ○ 検定試験により学習の成果が証明されることは、人材をマッチングする際の判断基
10 準のひとつとなり、人材を活用したい側にとっても意義があることから、学びと活動
11 の循環につながるのではないか。

12

- 13 ○ 検定試験の活用の幅が広がることは、学習者の学びの進化につながり、これにより
14 さらに検定試験が活用されることになるのではないか。

15

16 2 検定試験の活用の促進について

- 17 ○ 検定試験の活用の促進のための方策について、どのように考えるか。

【これまでの御意見】

《主に検定事業者に期待する取組について》

- 検定事業者は、大学等の活用者に対して、検定試験の活用方策を示す必要がある。
- 職員を採用する側からの観点では、検定試験の難易度を示してもらえるとありがたい。
- 自己評価シートからでは検定の難易度はわからないが、だからこそ、自己評価シートが広く使えるという側面もある。

《主に人材を求める側に期待する取組について》

- 人材を求めている側が、どのような資格を持っている者を必要としているかを発信することが、人材のマッチングにとって重要。
- 履歴書には、一部の検定試験については記載されていることがあるが、それ以外の検定試験についてはほとんど記載されない。検定試験の結果をアピールしてよいという風土ができるとうい。

《その他、活用の現状について》

- 専門学校では、以前は、簿記や秘書などの検定を多く受けていたが、現在は専門学校の中心が医療系分野の国家資格を目指すものにシフトしており、

取得しやすい民間の検定試験の受検者が増えている。このような検定試験は、検定試験に向けた努力や学習の成果を評価しやすいため、専門学校で使われることが多い。

- 検定試験には、世代を超えて共に学ぶこと等により、家族・職場でコミュニティができるという意味もある。
- 企業の採用にとって必要なスキルは、物事をやりきる力のような「ファンダメンタル・スキル」とすぐ使える技術のような「ポータブル・スキル」に分かれる。企業の人事は、どのような検定がどのようなスキルを測定しているのかという事例を持っているのではないか。

《その他、活用の促進のための環境づくりについて》

- シニアな受検者による検定試験の活用について、今後、検定を実施する側や学習機会を提供する側の連携や情報共有を図って、検討する必要があるのではないか。
- 検定試験について、【意義／活用／評価】という軸と、【自分自身の成長／ボランティアとしての地域活動への貢献／報酬を得ての地域活動への貢献／仕事】という軸でマトリックスを作成すると良いのではないか。
- 地域に眠っている人材を活用するためには、資格や検定が重要。
- 検定試験に向けて努力するプロセスも重要であり、学習者が検定試験に向けて努力するプロセスも、検定試験の活用者に見えればよい。そのためには、何らかの公的な主体かNPOが指針を示すとありがたい。